

始球式に立った女子高校生 カーブを動かした一通の手紙

会員記事

藤田 絢子 2020年10月18日 18時30分



マツダスタジアムでALSの啓発イベントをした広島県立御調(みつぎ)高校の生徒ら。長岡元教頭(中央)も駆けつけた



17日の広島—中日戦(マツダスタジアム)で、始球式のマウンドに、1人の女子高生が登場した。広島県立御調(みつぎ)高校の前生徒会長・角森(かくもり)巴海(ともみ)さん(3年)。投じた球はワンバウンドで捕手のもとへ。

「とても緊張しました。ALS(筋萎縮性側索硬化症)という病気をもっと多くの人に知ってほしい思いで、マツダスタジアムを目指しました」

同校では、教頭だった長岡貴宣さん(57)が2016年に難病のALSと診断されたことをきっかけに、生徒会が募金活動など難病支援活動をしている。もっと病気に対する認知度を高めたい——。その一心から、角森さんは仲間を代表して、昨年末、地元のカーブ球団の松田元(はじめ)オーナーに手紙を送った。

「カーブの試合がある日に、マツダスタジアムでALSについての理解を深めてもらう機会をつくっていただけないかと考えています。そのために企画の提案をさせていただきたいと思い、お手紙を書きました」

送る前に、何回も書き直したという便箋(びんせん)には、手書きで丁寧に文字がつづられていた。

広島は、市民球団として今年創立70周年を迎えた。松田オーナーは、「うちは地域とのつながりが重要。何かお手伝いできることがあるならやろうと思った」とすぐに賛同した。1月に球団職員を学校に派遣。調整を進めていった。

角森さんらはこの日、球場コンコースでパネルの展示や、球団と共同で作ったTシャツの販売会を開いた。売上金は難病支援の基金へ寄付する予定だ。

長岡元教頭も電動車いすに乗って駆けつけた。ALSは筋肉が徐々に衰えていく病気だ。声を発することはできないが、「生徒たちが自分たちで企画して実現したことなので、とてもうれしい。生徒の行動

力はすごい」と口の動きで表現し、笑った。

角森さんは言う。「手紙を送った時は実現しないかとも思っていた。将来無理かなと思うことがあっても、このことを思い出して頑張りたい」

御調高校は、数々の映画の舞台になった広島県尾道市にある。生徒数200人に満たない高校の生徒が、プロの球団を動かした。まさに、映画のような話だった。(藤田絢子)